

学会公式

Plant Biotechnology Vol.43 No.3 発行のご案内

Cytoplasmic Genome Regulation: Genomes and Regulatory Mechanisms of Chloroplasts and Mitochondria (Special Issue)

Preface to the special issue “Cytoplasmic Genome Regulation: Genomes and Regulatory Mechanisms of Chloroplasts and Mitochondria”
Tomohiko Kazama, Keiji Numata, Shin-ichi Arimura

Reviews

Recent advances in organelle-targeted gene delivery technologies using nanomaterials
Masaki Odahara, Keiji Numata
　近年、ペプチドやカーボンを基盤とするナノマテリアルを利用したオルガネラ標的型の遺伝子送達法が開発されている。これらの手法は、葉緑体やミトコンドリアを高効率に標的化できる点で、従来の遺伝子導入法とは大きく異なる特徴を有する。本稿では、これらの最新技術を紹介するとともに、今後の展望について述べる。

Improving plant photosynthesis by modifying Rubisco and its chaperone
Zhe Zhang, Yukina Sanga, Issei Nakazato, Hiroshi Fukayama, Hiroyoshi Matsumura, Shin-ichi Arimura, Wataru Yamori
　Rubiscoは光合成の炭素固定を担う酵素だが、触媒速度が遅く、植物の光合成能力を制限する主要因の一つとされる。生産性向上を目指し、点変異導入や異種Rubisco導入などの改変が試みられてきたが、抜本的な改善には至っていない。本総説ではRubisco改変研究の取り組みを整理し、葉緑体ゲノム編集やAIによるタンパク質構造予測など、研究加速につながる技術と今後の展望を概説する。

Diversification of uniparental inheritance mechanisms: Orchestrating the fine balance of cytoplasmic genome populations
Yoshiki Nishimura
　葉緑体・ミトコンドリアは独自のDNAを持ち、光合成や呼吸に必須の遺伝子を担う。これら細胞質DNAは多くの真核生物で主に母性遺伝し、その機構としてオートファジーや分解系などが提案されている。本総説はコピー数や核様体構造、細胞内集団遺伝学の観点から、その仕組みと進化を概説する。

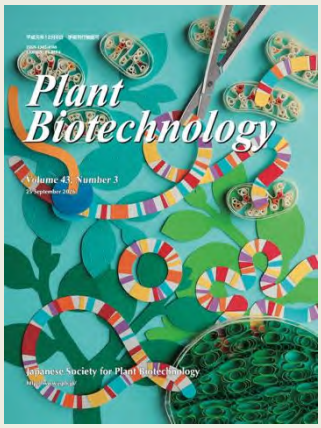
Plant cytoplasmic male sterility: Long-standing questions, practical issues and the evolution of restorer-of-fertility genes
Naoyuki Katsura, Takumi Arakawa, Kazuyoshi Kitazaki, Pascal Touzet, Tomohiko Kubo
　細胞質雄性不稔性（CMS）について現在の問題点を整理する。ここでは、明快な説明が未だつけられていない観察や、新たに得られたデータが見かけ上従来の常識と一致しないことをいくつか取り上げて議論する。こうした問題点について、幅広い視点を取り入れることで解明していく可能性を提案したい。

目次

Plant Biotechnology Vol.43 No.3
発行のご案内 1
新会長ご挨拶 3
学会賞受賞インタビュー 4
第43回（鳥取）大会のご報告 8
ランチョンセミナーのご報告 9
市民公開シンポジウムのご報告 9
学生優秀発表賞の決定 10
IAPB2026参加報告 11
会議参加レポート 11
名誉会員の推薦 13
定款/規程の変更 13
学会賞推薦のお願い 14
特別賛助会員のご紹介 14

本号トップの画像

Plant Biotechnology誌最新号の表紙写真から



Plant cytoplasmic genomes: Mitochondrial and chloroplast DNA

Created for the special issue "Cytoplasmic Genome Regulation: Genomes and Regulatory Mechanisms of Chloroplasts and Mitochondria", this paper quilling artwork by Hiroko Uchida depicts plants, chloroplasts and mitochondria, together with chloroplast and mitochondrial DNA.

Original Papers

Embryo rescue uncovers an essential role for MEF45 in four mitochondrial RNA editing events in Arabidopsis
Matthias Buger, Franziska Glass, Anja Jörg, Mizuki Takenaka
植物ミトコンドリアのC-to-U RNA編集はしばしば生存に必須であり、変異体は致死性を示すため、その機能解析が困難である場合がある。本研究ではPPR型RNA編集因子MEF45変異体を胚救済法で育成し、複数のRNA編集欠失を確認、同手法が必須遺伝子解析に有効であることを示した。

Chlorophagy of photodamaged chloroplasts involves the degradation of disorganized nucleoids in Arabidopsis leaves
Sakuya Nakamura, Shinya Hagihara, Masanori Izumi
葉緑体を丸ごと分解するオートファジー経路である「クロロファジー」が、正常な構造を維持できなくなった核様体を含む葉緑体を除去することで、光障害条件における葉緑体核様体の品質管理に関わることを示した。

Histological and transcriptomic analyses of Tadukan-type cytoplasmic male sterile rice lacking anther dehiscence
Ayumu Takatsuka, Mikiko Kojima, Yumiko Takebayashi, Hitoshi Sakakibara, Tomohiko Kazama, Kinya Toriyama
細胞質雄性不稔性は、F1ハイブリッド種子採取に利用されている。今回は、インディカイネTadukanタイプの表現型調査とトランスクリプトーム解析を行った。葯におけるジャスモン酸応答が抑制され、細胞壁制御に起因する組織構造変化が起こらないという分子メカニズムが推測された。

Fluorescent proteins that faithfully reflect the native architecture of chloroplast nucleoids in *Chlamydomonas reinhardtii*
Haruki Kanazawa, Hiyori Nakamura, Noa Akimoto, Kyoko Takagi, Tomonao Matsushita, Ryutaro Tokutsu, Yoshiki Nishimura, Yusuke Kobayashi
単細胞性緑藻クラミドモナスにおいて葉緑体核様体は、細菌型ヒストン様タンパク質HUと蛍光タンパク質（FP）の融合タンパク質を用いてライブイメージングが行われてきた。しかし、FPの種類によっては凝集等のアーティファクトを誘発する課題があった。本研究で複数の黄緑色FPを比較した結果、mCitrineが葉緑体核様体の可視化に最適であることを突き止めた。

Deletion of *orf352* in Wild Abortive-type cytoplasmic male sterile rice restores pollen starch accumulation but not seed fertility
Hsu Yi Mon, Shin-ich Arimura, Tomohiko Kazama
WA型CMSイネのCMS原因遺伝子*orf352*をターゲットとするミトコンドリア移行シグナル付きTALENを用いて*orf352*のノックアウトを行った。この結果、花粉の発達が一部回復し、澱粉の充実が見られるようになったが、種子稔実の回復は見られなかった。このことは、WA型CMSイネは*orf352*以外にもCMS原因遺伝子が存在することを示している。

Theophylline-dependent synthetic riboswitches enable tightly regulated inducible gene expression in tobacco plastids
Rika Yamane, Atsushi Ogawa, Takashi Shiina, Yuzuru Tozawa, Yoichi Nakahira
葉緑体工学（葉緑体形質転換）では、遺伝子発現を厳密に制御できる汎用性の高い誘導系が十分に整備されていない。本研究では、テオフィリン依存的に翻訳段階で遺伝子発現を制御する「人工リボスイッチ」に注目し、タバコ葉緑体における性能を評価した。その結果、10倍を超える発現誘導効率（ON/OFF比）を示す複数のリボスイッチを見出した。

Notes

Complete chloroplast genome sequences of two miniaturized *Galium* species (Rubiaceae) from Yakushima Island
Masamitsu Ishibashi, Eiji Gotoh, Yoshihisa Suyama, Daiki Takahashi
本研究では、屋久島固有の矮性分類群であるアカネ科ヤマムグラ属ヤクシマムグラとヤクシマヤマムグラを対象に、葉緑体ゲノム配列を決定し、比較解析を行った。その結果、2種の葉緑体ゲノムは高い保存性を示した一方、IR境界に差異が認められた。得られた配列情報は、今後の分類・系統・集団遺伝学的研究の基盤となると考えられる。

Integrated web interface for pentatricopeptide repeat (PPR) motif discovery and target prediction in plants
Keisuke Igarashi
PPR（ペンタトリコペプチドリピート）タンパク質のP型に特化したRNA標的予測Webアプリ「PPPRPP」を開発した。生物物理的親和性データに基づくスコアリングとモチーフ探索・可視化を統合し、植物オルガネラRNA代謝研究における標的RNA候補部位の同定を効率化する。

Short TALE-binding domains enable mitochondrial genome editing in *Arabidopsis thaliana*
Yoshiki Harada, Issei Nakazato, Shin-ichi Arimura
シロイヌナズナで、ミトコンドリアゲノム編集用*TALE*結合領域を*6–7 bp*まで短縮しても切断・塩基変換活性は維持された。一方で発芽不全や生育障害が多発し、短縮型は機能するが特異性と生体適合性に課題がある可能性が示された。

Specific DNA-binding sites of bacterial-type chloroplast RNA polymerase in young Arabidopsis seedlings
Sho Fujii, Yushi Kurotaki, Kosei Noto, V. Miguel Palomar, Andrzej T. Wierzbicki
被子植物の葉緑体ゲノムに含まれる約150の遺伝子は、細菌型とファージ型という2種類のRNAポリメラーゼによって転写される。細菌型RNAポリメラーゼは光合成に不可欠であるが、ゲノム全体の転写開始点の分布は不明であった。本研究では、ChIP-seqデータからシロイヌナズナ葉緑体で新発見の16領域を含む少なくとも32の転写開始点を推定し、葉緑体の遺伝子発現研究の新たな枠組みを提示した。

新会長ご挨拶

2026年9月に一般社団法人日本植物バイオテクノロジー学会の会長を拝命いたしました、理化学研究所の平井優美です。これから2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

本学会は、1981年に「日本植物組織培養学会」として発足して以来、2026年で45周年を迎えます。発足の背景には、翌年に予定されていた第5回国際植物組織培養会議の日本開催がありました。設立当初から本学会は、理学、農学、薬学分野を中心に、植物組織培養に関する基礎研究から応用研究まで、幅広い研究成果を分野横断的に共有し、議論する場として発展してきました。その後、植物科学における分子生物学の進展を受け、1995年に植物核酸タンパク質研究会と統合し、「日本植物細胞分子生物学会」へと改称されました。これにより、植物組織培養に加えて、分子生物学、細胞工学、遺伝子工学へと対象領域を広げ、会則にも理学、農学、薬学に加え、工学分野の研究者の参画を期することが明記されました。さらに、オミックス解析や情報科学の進展、ゲノム編集をはじめとする新植物育種技術の発展により、植物科学と植物バイオテクノロジーを取り巻く状況は大きく変化してきました。こうした流れを受け、2020年7月には「日本植物バイオテクノロジー学会」へと改称され、植物バイオテクノロジー全般を扱う学会としての位置づけがより明確になりました。

このように、本学会は一貫して、植物科学における「技術」を重視しつつ、時代の変化を的確に捉えながら、基礎研究から応用、実用化までを視野に入れて発展してきました。1996年以降、6つの学会賞が順次設立されましたが、その最初が技術賞であったことにも、技術開発とその実用化を重視してきた本学会の姿勢が表れています。

現在、気候変動は加速度的に進行して深刻さを増し、地政学的リスクの高まりも相まって、食料、エネルギー、環境をめぐる地球規模の課題はますます大きくなっています。その解決に向けて、植物科学および植物バイオテクノロジーに寄せられる期待は一層高まっています。こうした中、基礎研究に根ざした新たな技術開発を進めるとともに、その成果を社会へとつなげていく取り組みを、学会として進めていく所存です。

その一つが、産学官連携のさらなる強化です。本学会では、2021年より年2回、産学官協力セミナーを開催し、先端技術に加えて、その実用化、規制、社会受容などを含む幅広いテーマを取り上げてきました。2026年9月に発足した新体制の理事会では、産業界の視点をより積極的に学会活動へ取り入れるため、民間企業からご参画いただく業界特任理事を新設しました。産業界の現場の声を学会に届けていただくことで、基礎研究、技術開発、社会実装をつなぐ場としての機能をさらに高めていきたいと考えています。



また、冒頭で述べたように、本学会は、国際会議の日本開催を機に、世界最先端の研究に触れる学術交流の場として発足しました。これまでにも、国際シンポジウムや日韓中三か国シンポジウムの開催、年会における発表スライドの英語化など、国際化に向けた取り組みを進めてきました。今後はさらに、海外の研究者や関連学会との交流を通じて、第一線の研究と技術の動向に触れ、緊張感と刺激に満ちた議論と情報交換ができる場を広げていきたいと考えています。

45年を経て、学会創設期を支えてこられた先生方から次の世代へと、学会運営の担い手も移りつつあります。これまで大切に受け継がれてきた理念と歩みを踏まえ、時代の流れにも目を向けながら、本学会らしく、植物バイオテクノロジーのさらなる発展に力を尽くしてまいりたいと思います。会員の皆様のご支援とご協力を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2026-2027年度役員

理事
会長：
　平井 優美（理研）
副会長：
　矢﨑 一史（京大）
幹事長：
　高橋 征司（東北大）
編集委員長：
　七里 吉彦（森林機構）
会計：
　池田 美穂（福井県大）
広報：
　棟方 涼介（京大）
男女共同参画・キャリア支援：
　藤原 すみれ（産総研）
国際化：
　遠藤 真咲（農研機構）
産学官連携：
　佐々木 克友（農研機構）
庶務：
　山田 泰之（神戸薬大）
業界特任：
　小原 一朗（キリン）

監事
　庄司 翼（富山大）
　土岐 精一（龍谷大）

学会賞受賞者インタビュー

有村先生のご略歴

1997年3月
東京大学農学部卒業

2002年3月
東京大学大学院農学生命科学研究科
博士（農学）取得

2002年4月～2004年10月
同　日本学術振興会特別研究員
（PD）

2004年11月～2011年3月
同　助手・助教

2007年8月～2009年2月
ユタ大学生化学部 日本学術振興会
海外特別研究員

2011年4月～2024年1月
東京大学大学院農学生命科学研究科
准教授

2012年10月～2016年3月　科学技術振興機構 さきがけ研究者

2024年2月～現在
東京大学大学院農学生命科学研究科
教授

【学術賞】
有村 慎一　先生
（東京大学大学院農学生命科学研究科）
「植物オルガネラゲノム編集技術の開発・応用と学術的貢献」

1．本受賞内容について簡単にご説明いただけますでしょうか

植物のミトコンドリアと葉緑体のゲノム編集技術を開発し、その効率を高めてきました。なかでも、植物ミトコンドリアのゲノム編集を世界で初めて実現しました。開発した技術を用いて、ミトコンドリアでは細胞質雄性不稔の原因遺伝子の同定と機能解析を、葉緑体では光合成機能の改良や薬剤耐性の付与を進めています。こうした研究成果と、論文発表や学会活動を通じた貢献を評価していただきました。

2．本受賞内容のご研究に取り組もうとされたきっかけはなんでしょうか

きっかけは二つあります。大学生の頃から植物のミトコンドリアや葉緑体を研究する中で、オルガネラゲノムを改変できないことが、この分野の発展を妨げていると感じていました。いつかその壁を越えたいと思っていたのです。もう一つは憧れていたJST「さきがけ」に、挑戦的な課題として植物オルガネラゲノム編集を提案したことです。幸い採択されましたが、今度は自分で、とても難しい課題に取り組まざるを得なくなりました（笑）。

3．本受賞内容は何年くらいの成果の積み重ねでしょうか

2012年に「さきがけ」に採択されてからですので、約14年間の成果になります。

4．本受賞内容にまつわる苦労話、思い出深いエピソードなどはありますか

最初の3年間はまったく成果が出ず、領域会議や中間報告会ではつらい思いをしました。転機となったのは、推薦者でもある風間智彦先生（当時東北大学、現九州大学准教授）と鳥山欽哉先生との共同研究です。私たちの研究室だけでシロイヌナズナを使って試みていた頃には進まなかった研究が、お二人の長年にわたるイネの細胞質雄性不稔研究と結びつき、突破口が開けました。
植物ミトコンドリアのゲノム編集技術を開発した後は、それを携えてフランスでサバティカルの共同研究を行う予定でしたが、コロナ禍で実現しませんでした。大学への入構も制限される中、当時修士課程の中里一星さん（現特任助教）と、X（当時のTwitter）で知った哺乳類ミトコンドリアの新しい標的塩基置換技術を植物に応用し、半年で成功させました。成果は『Nature Plants』に掲載されましたが、韓国の研究者による同様の成果も同じ号の隣のページに掲載されました。成功の喜びと、あと少し遅ければという冷や汗の両方が、今ではよい思い出です。



葉緑体ゲノムの標的塩基をCからTに置換する技術の開発を記念して、サイエンスイラストレーターのウチダヒロコ氏に制作いただいたペーパークイリング作品。

5．本受賞内容と「植物バイオテクノロジー」とのかかわりはどのようにご説明できますでしょうか

植物バイオテクノロジーの柱の一つは、植物の設計図であるDNA、すなわちゲノムの改変です。ミトコンドリアや葉緑体のオルガネラゲノムが担う遺伝情報は全体のごく一部ですが、光合成や呼吸、F1ハイブリッド育種に利用される細胞質雄性不稔など、植物の生命活動とその利用に重要な役割を果たします。これまでは改変が難しく、基礎研究も応用も制約されてきました。

私たちのゲノム編集技術は、その制約を解く手段の一つです。現在、日本を含む世界12カ国の研究者と約150件の共同研究プロジェクトを進めています。この勢いを生かして分野の発展に貢献し、国際共同研究を通じて日本の研究の存在感も高めていきたいと思います。

6．本受賞に際して感謝したい人はいますか

最初の突破口をともに開いてくださった風間智彦先生と鳥山欽哉先生に感謝しています。また、成果が出ない時期も温かく見守ってくださった東大植物分子遺伝学研究室の堤伸浩先生、髙梨秀樹先生、スタッフ、そして多くの学生に感謝しています。特に葉緑体ゲノム編集技術は、開始当時M1だった中里一星さん（現特任助教）の献身がなければ、ここまで発展しなかったと思います。技術を使ってくださる国内外の共同研究者にも感謝しています。多様で興味深い研究に一緒に取り組めることを、幸せに感じています。

7．先生にとって、日本植物バイオテクノロジー学会はどのような存在でしょうか

以前取り組んでいた「植物ミトコンドリアの分裂と融合」は、植物の細胞・分子生物学に関する研究でした。ちょうど学会が「日本植物細胞分子生物学会」と名乗っていた頃に入会し、奨励賞もいただいて励まされました。その後、私がオルガネラゲノム編集技術の開発に注力し、成果が出始めた頃に、学会も「日本植物バイオテクノロジー学会」へと名称を変えました。不思議な縁を感じています。東京大学で開催された年会の運営や国際化担当理事も務め、貴重な経験をさせていただきました。

8．研究生活に関して座右の銘、ポリシーや心がけていることなどはございますか

好きになった分野に世界的な貢献をし、日本や所属機関の研究の存在感も高めたいと思っています。一方で、研究は失敗の連続で、いつもよい成果が出るわけではありません。そこで大切にしているのが「生きてナンボの研究人生」です。成果が出ない時期にも、今の自分にできる学会発表や論文発表を続け、研究を続けていく。そして、いつかよい成果を上げるという志と努力を忘れないようにしています。

9．本学会の若手・中堅研究者にアドバイス、メッセージをお願いします

AIの急速な進展もあり、研究や社会の先行きが読みにくく、不安を感じることもあると思います。それでも、それぞれが研究者としての人生を楽しむことは、AIには代われない大切な軸です。AIも上手に使いながら、自分にとっての幸せと研究成果の両方を追求していけたらと思います。



東京大学植物分子遺伝学研究室のメンバー（2026年）。写真に写っていない教員・スタッフや、国内外の多くの共同研究者にも支えられ、研究を進めています。

関先生のご略歴

1988年
京都大学農学部卒業

1990年
京都大学大学院農学研究科修士課程修了

1994年
広島大学大学院理学研究科博士課程修了 博士（理学）

1995年
理化学研究所植物分子生物学研究室
基礎科学特別研究員

1998年
理化学研究所植物分子生物学研究室
研究員

2006年
理化学研究所植物科学研究センター
植物ゲノム発現研究チーム
チームリーダー

2008年
横浜市立大学木原生物学研究所
客員教授（兼任）

2012年
ベトナム農業科学アカデミー
(VAAS)　客員教授（兼任）

2013年
理化学研究所環境資源科学研究センター植物ゲノム発現研究チーム
チームリーダー

2013年
マヒドン大学 客員教授（兼任）

2017年
パンジャブ大学 客員教授（兼任）

2018年
理化学研究所開拓研究本部
関植物工ピゲノム制御研究室
主任研究員（兼任）

2023年
埼玉大学大学院理工学研究科
連携教授（兼任）

2024年
ラホール経営科学大学
非常勤教授（兼任）

2025年
理化学研究所環境資源科学研究センター植物ゲノム発現研究チーム
チームディレクター

【学術賞】

関 原明　先生

（特定国立研究開発法人理化学研究所環境資源科学研究センター）

「植物の環境ストレス応答と耐性強化に関わる化学生物学的研究」

1．本受賞内容について簡単にご説明いただけますでしょうか

地球温暖化に伴い、干ばつ、高温、塩害などの環境ストレスによる農作物への被害が世界的に深刻化しています。私は、植物がこうした環境ストレスにどのように応答し、耐性を獲得するのかという分子機構の解明と、その知見を活用したストレス耐性強化技術の開発に取り組んできました。

特に、植物の代謝産物であるエタノールや酢酸を低濃度で処理することで、植物が本来備えているストレス耐性機構を活性化し、乾燥、高温、塩ストレスなどへの耐性を高められることを見いだしました。エタノールについては、気孔閉鎖、熱ショックタンパク質の誘導、活性酸素の蓄積抑制など、複数の仕組みにより植物を環境ストレスから守ることを明らかにしています。また、酢酸については、ヒストン修飾などのエピジェネティックな遺伝子発現制御を介して乾燥耐性が高まる仕組みを明らかにしました。

現在は大学・研究機関に加え、企業、農業試験場、JA、農業法人、農家とも連携し、エタノールを利用した技術のさまざまな作物への応用を進めています。さらに、ヒストン脱アセチル化酵素やストレス応答性遺伝子・非翻訳型RNAの研究などを通じ、植物の環境適応機構も明らかにしてきました。今回の受賞では、基礎的な分子機構の解明から、環境に優しい化合物を利用した耐性強化、農業現場への応用まで研究を発展させてきた点を評価していただいたものと考えています。

2．本受賞内容のご研究に取り組もうとされたきっかけはなんでしょうか

理化学研究所で植物の環境ストレス応答や遺伝子発現を研究する中で、地球温暖化や異常気象に対応できる作物の開発が重要だと強く感じるようになりました。そこで、遺伝子だけでなく、RNA、エピジェネティクス、さらに身近な低分子化合物を利用して、植物が本来備えているストレス耐性を引き出す研究に挑戦したことが、現在の研究につながっています。

3．本受賞内容は何年くらいの成果の積み重ねでしょうか

理化学研究所で研究を開始した1995年頃から現在まで、約30年間の研究成果の積み重ねです。植物ゲノムの発現解析や環境ストレス応答の基礎研究から始まり、RNAやエピジェネティクス、低分子化合物を利用したストレス耐性強化へと発展し、現在は農業現場への応用や社会実装にも取り組んでいます。

4．本受賞内容にまつわる苦労話、思い出深いエピソードなどはありますか

特に思い出深いのは、エタノールによるストレス耐性強化を見いだした時です。ストレス耐性を高める化合物を探索していた際、化合物を溶かすための溶媒そのものに効果がある可能性に気付きました。複数の溶媒を調べたところ、エタノールだけが植物の塩ストレス耐性を高めることが分かりました。この予想外の発見が、その後の乾燥・高温ストレス耐性の研究や、現在のEGAO技術へとつながりました。基礎研究の発見を実際の作物や農業現場で使える技術へ発展させる過程には多くの試行錯誤がありましたが、農家の方々から実際に効果があったという声をいただいた時は大変うれしく感じました。





（写真左）
恩師である篠崎一雄先生と第67回日本植物生理学会年会の贈呈式(2026年)にて

（写真右）
授賞式にて

５．本受賞内容と「植物バイオテクノロジー」とのかかわりはどのようにご説明できますでしょうか

植物の環境ストレス適応機構を分子レベルで解明し、その知見を利用して植物の能力を高めるという点で、植物バイオテクノロジーと密接に関わっています。完全長cDNAや遺伝子発現解析から、RNA、エピジェネティクス、低分子化合物を利用した技術へと研究を発展させてきました。特に、基礎研究の成果を実際の作物や農業現場へ展開し、基礎から応用、社会実装までをつなぐことを重視しています。

６．本受賞に際して感謝したい人はいますか

これまでご指導、ご支援いただいた先生方、研究室のメンバー、国内外の共同研究者の皆様に心より感謝しています。特に、理化学研究所で研究を始めた際にご指導いただいた篠崎一雄先生からは、植物ゲノムの発現・機能解析や環境ストレス応答研究の基礎を学び、その後、自分の研究室を立ち上げ、研究を発展させる過程でも多くの貴重なご助言をいただきました。また、大学院時代にご指導いただいた森川弘道先生、山田康之先生、理化学研究所で多大なご支援をいただいた齊藤和季先生、袖岡幹子先生にも深く感謝しています。

そして何より、これまで研究室で共に研究を進めてくださったメンバーの皆様、ならびに国内外の多くの共同研究者の皆様との協力があってこそ、研究をここまで発展させることができました。今回の受賞は、皆様とともに積み重ねてきた成果に対していただいたものだと感じています。

７．先生にとって、日本植物バイオテクノロジー学会はどのような存在でしょうか

長年にわたり研究成果を発表し、多くの研究者と交流しながら、自分の研究を発展させてきた大切な学会です。基礎から応用まで幅広い研究者が集まり、新しい研究の方向性や共同研究のきっかけを得られる貴重な場でもあります。今後は、若い研究者の育成や植物バイオテクノロジー分野の発展にも貢献したいと考えています。本学会から学術賞をいただけたことを大変光栄に感じています。

８．研究生活に関して座右の銘、ポリシーや心がけていることなどはございますか

基礎研究を大切にしながら、その成果をできるだけ社会に役立つ形へつなげることを心がけています。また、既存の研究分野にとらわれず、面白いと思ったことには積極的に挑戦しています。エタノールの研究も予想外の結果から始まりましたが、その小さな発見を大切にして発展させてきました。さらに、研究室のメンバーや国内外の共同研究者とのつながりを大切にし、お互いの専門性を生かして新しい研究を生み出すことも意識しています。

９．本学会の若手・中堅研究者にアドバイス、メッセージをお願いします

自分が本当に面白いと思う研究テーマを大切にし、既存の枠にとらわれず新しいことに挑戦してほしいと思います。研究では予想通りの結果が得られるとは限りませんが、予想外の結果の中に新しい発見の種が隠れていることがあります。また、国内外の研究者との交流や共同研究も大切です。異なる専門分野の研究者との出会いから、自分だけでは思いつかなかった研究が生まれることがあります。基礎研究をしっかり積み重ねながら、その成果が将来どのように社会や農業に役立つのかという視点も持っていただければと思います。失敗を恐れず、長い目で研究を楽しみながら、自分自身の研究を育てていっていただきたいです。



理研CSRS植物ゲノム発現研究チームの現メンバーおよび歴代メンバー等と還暦を祝う会（2026年）にて

第43回（鳥取）大会のご報告

第43回日本植物バイオテクノロジー学会（鳥取）大会は、2026年9月4日（金）から6日（日）までの3日間、とりぎん文化会館と鳥取市民会館を会場に、現地参加とオンライン参加を併用するハイブリッド方式で開催されました。皆様のご協力により、盛況のうちに大会を終えることができました。参加者は合計463名（事前参加登録403名、当日参加60名）で、一般講演は口頭発表109題、ポスター発表81題の計190題でした。これらの演題総数は近年の大会とほぼ同程度でした（2025年神戸大会228題、2024年仙台大会162題、2023年千葉大会179題）。さらに、シンポジウム数は7件（41題）で、このうち遺伝子組換え作物30年記念シンポジウムを含む2件は公開シンポジウムとして開催されました。またランチョンセミナー2件が行われ、企画演題の規模はここ数年で最大となりました。

一方、地方都市での開催ということもあり、市内のスポーツイベントなどと日程が重なって宿泊施設の予約が取りにくい状況となりました。大会前日の午後には大雨の影響で鳥取行きのJR特急に運休や遅延が発生しましたが、その後運転が再開され、夜の最終便を含む列車が遅れながらも到着し、初日を迎えることができました。また、初日の午前中には、会場のWi-Fiへの負荷などにより、一部の会場でオンライン配信トラブルが発生しましたが、座長の先生方、会場係の実行委員、会場におられた参加者の先生方には、臨機応変にご対応いただきました。ご不便をおかけした皆様にお詫び申し上げます。今回の経験と課題、改善点を次年度以降の大会に引き継ぎ、円滑な運営に役立てていただければと考えています。ご対応くださった皆様に、改めて感謝申し上げます。

学生優秀発表賞の選考は口頭発表を対象に実施し、75名から立候補をいただきました。初日の夕方にはポスター会場でミキサーが開かれ、ご支援いただいた企業からご提供いただいたチューハイやビール類を片手に、参加者同士の交流や活発な議論が交わされました。2日目の夕方には、鳥取砂丘コナン空港のコナンホールで懇親会を開催しました。211名にご参加いただき、マグロの解体ショーに加え、刺身や寿司、鳥取牛のステーキ、カニなどの地元の味と日本酒をお楽しみいただきました。今大会には14の企業・団体（現地展示5件、広告など9件）からご協賛をいただきました。ご支援くださった皆様に厚く御礼申し上げます。

会期翌日の9月7日（月）には、関連企画として砂丘植生観察会と乾燥地研究センター見学会を開催しました。30名の参加者とともに、起伏に富む鳥取砂丘を歩きながら、希少な植物の現地生態について講師の詳しい説明を伺いました。乾燥地研究センターでは、植物のストレス研究に用いるさまざまな装置を見学しました。鳥取ならではの自然と研究に触れていただく機会となりました。

鳥取大会では、参加者の皆様の活発な発表と議論を通じて、植物バイオテクノロジーに関する知見を共有することができました。ご参加くださった皆様、開催にご協力・ご支援くださったすべての皆様に、実行委員一同、心より感謝申し上げます。次年度の大会は、2027年9月2日（木）から4日（土）まで東洋大学朝霞キャンパスで開催される予定です。東洋大学で再び皆様にお会いできることを楽しみにしております。

第43回日本植物バイオテクノロジー学会（鳥取）大会実行委員長
明石 欣也（鳥取大学農学部）



総会および受賞講演



ポスター会場の様子



鳥取砂丘コナン空港での懇親会



鳥取砂丘での植物観察会

大会実行委員長
明石欣也（鳥取大学 農学部）

大会実行委員（所属別に50音順）
石原 亨、岩崎 崇、上野 琴巳、
岡 真理子、佐久間 俊、藪田 行哲
（鳥取大学 農学部）

水谷 正治
（神戸大学大学院 農学研究科）

西村 浩二
（島根大学 生物資源科学部）

梅原 三貴久
（東洋大学 生命科学部）

七里 吉彦
（森林研究・整備機構 森林総合研究所
森林バイオ研究センター）

第44回（埼玉・朝霞）大会
大会実行委員長：
梅原 三貴久（東洋大学）
会期：
2027年９月2日（木）～4日（土）
会場：
東洋大学朝霞キャンパス
懇親会：
学生食堂Umart!

開催日程（予定）：
9/1（水）午後 代議員総会
9/2（木）1日目
9/3（金）2日目
9/4（土）午前 3日目
午後 市民公開シンポジウム

シンポジウムを公募します
12月応募開始予定

ランチョンセミナーのご報告

鳥取大会ではランチョンセミナー「キャリアのかたち」として、３名の講師をお招きして、その経験や心構えについてご講演いただきました。最初のシンポジストである平井正良氏（サントリービバレッジ＆フード株式会社）はキャリアコンサルタントの資格を取得されており、キャリアの形成についての基本的な考え方をご講演いただきました。計画的偶然性理論（個人のキャリアの約８割は予期せぬ偶然によって形成される）についての説明もあり、折しも次の演者も、この言葉で出てくるようにキャリア形成を考える上での重要なタームとでした。また、この考え方は、現在進行形でキャリアを考えている学生や若手研究者のみならず、学生の指導的な立場の方にも有益な情報が含まれていました。

こうしたキャリア形成に関わる基本的な考え方を聞いた上で、眞木祐子氏（雪印種苗株式会社）および坂本美佳氏（国立遺伝学研究所）には、ご自身のキャリアについてご講演いただきました。眞木氏は、社会人として仕事をしながら博士を取得されたことについて、社会人ドクターとしての苦労や困難についてご講演いただき、博士の価値についてもお話いただきました。博士が心の盾という考え方は新鮮でした。坂本氏は、ご出産をされた後に博士を取得されたというキャリアの方で、当委員から連絡を受けた公募に応募したら、今の職につながったという、人と人とのつながりの大事さを実感させられるエピソードを交えて、ご講演いただきました。

会場およびオンラインと多くの方に参加していただき、アンケート結果からも非常に好評でした。ご講演ファイルおよびアンケート結果については学会HPからダウンロードできますので、ご興味のある方はダウンロードして頂けたらと思います。

ご講演資料等のファイルダウンロード方法

学会HP→学会資料・会員情報ページ→学会からのファイル共有→男女共同参画→第43回大会(2026年)資料

男女共同参画・キャリア支援委員会
三浦 謙治（筑波大学）





鳥取大会ランチョンセミナーの様子

市民公開シンポジウムのご報告

本大会では、2026年9月6日（日）に鳥取市民会館大ホールにて、2件の市民公開シンポジウムが開催されました。前半は遺伝子組換え作物30年記念シンポジウム「遺伝子組換え作物30年―教訓と期待―」で、現地及びオンラインの参加者はそれぞれ115名と117名（計232名）となりました。演題および演者は以下のとおりです（敬称略）：『遺伝子組換え作物の研究開発の黎明期から現在までを振り返る』（田部井 豊・東洋大学）、『世界の遺伝子組換え作物の現状と展望』（中井秀一・バイエルクロップサイエンス）、『遺伝子組換え作物の需要と受容』（小泉望・大阪公立大学）、『国内栽培は何故進まない？』（徳本 修一・トゥリーアンドノーフ）。本シンポジウムでは、遺伝子組み換え作物の歴史、特になぜ遺伝子組み換え作物が日本で浸透しなかったのかについて、政治的・社会的背景など多様な視点からの洞察をご紹介いただきました。さらに国外における遺伝子組み換え作物の研究開発の実例や、これからの農業にどのように植物バイテク技術が貢献できるのかという議論も活発にされました。多様な業界の方々のご講演のほか、最後には総合討論も設けられ、植物バイテク分野が目指す未来について考えさせられた、本学会にとって意義深いシンポジウムでした。

後半は「未来を救う植物バイテク～新技術が拓く飢餓のない未来～」と題しまして、現地74名、オンライン113名（計187名）のご参加を頂きました。こちらのシンポジウムの演題と演者は以下の通りです（敬称略）：『酷暑に負けない“タフな作物”をアフリカの人々とつくる！』（辻本 壽・鳥取大学）、『小さな宇宙細胞！！理解し改変出来る時代は近い？』（石井 孝佳・鳥取大学）、『“かたち”が収穫を変える：穂と花のデザイン学』（佐久間 俊・鳥取大学）、『ゲノム編集で支える豊かな食卓』（久野 裕・岡山大学）、『土の中のヒーロー“見えない相棒”と育てるやさしい農業』（上中 弘典・鳥取大学）。夏場の異常な暑さに代表されるような近年の急激な気候変動は、地球規模で食糧生産の脅威になっており、この過酷な環境の中で作物生産を維持するのは喫緊の課題です。これに対して本シンポジウムでは、食糧生産における従前の育種の貢献をご説明いただくとともに、染色体工学やゲノム編集、また共生微生物の活用、という農業に革新をもたらしうる新しい植物バイオテクノロジーについてもご発表いただきました。中高生などこれから専門性を選択する若い世代に向けたメッセージも多く、植物バイオテクノロジーの魅力が幅広い方々に伝わった会であったと思います。

企画してくださった運営スタッフの皆様、また講演者の先生方に感謝申し上げます。

広報委員長　棟方涼介（京都大学）





学生優秀発表賞の決定

学生優秀発表賞の受賞者が決定しました。鳥取大会では、口頭発表75題のエントリーがあり、1演題につき計4名の審査員が、研究への取組み、質疑応答、プレゼンテーションの3項目を重点項目として審査しました。以下の13題の発表が特に優れていると認められ、学生優秀発表賞を授与することに決定しました。受賞者には後日、賞状が送られます。

受賞者の皆様、おめでとうございます。

（受賞者は50音順、敬称略）

○**大橋 そら**（埼玉大・院理工）
油脂産生藻類*Nannochloropsis*が有する3種類のNAD kinaseの同定と機能解析

○**大山 真実**（東北大・院工）
パラゴムノキ (*Hevea brasiliensis*) 由来天然ゴム生合成酵素の相互作用タンパク質群の機能解析

○**小和田 篤熙**（東北大・院農）
WA型CMSイネのCMS原因遺伝子*WA352*は稔性回復系統RT98Cが持つ複数のPPR遺伝子によって発現制御される

○**川上 哲也**（東農工大院・連合）
複数の起源を持つコケ植物由来イソプレン合成酵素の機能解析

○**菊地 ひめか**（千葉大・院・薬）
グルコシノレート分解経路におけるラファヌサム酸生成機構の酵素化学的検証

○**黒瀬 飛揚**（奈良先端大・バイオ）
浸透圧ストレス下におけるシロイヌナズナ道管細胞の細胞壁形成制御

○**桑山 翔悟**（名古屋大・院理）
低分子化合物AG126およびその誘導体を用いた細胞膜H^+-ATPaseリン酸化制御機構の解析と気孔開度制御剤への応用

○**小板 青空**（京大・生存研）
シダ植物におけるイソプレン合成酵素遺伝子の探索と分子進化解析

○**小坂 七海**（東京大・院農学生命科学）
シロイヌナズナ葉緑体・ミトコンドリアゲノム特異的なランダムA-to-G変異導入技術の開発

○**坂田 忠大**（日本大院・生物資源科学研究科）
ダリアにおける老化に関与する*NAC*転写因子の探索および*DvNAC3*-RNAi形質転換体の作出

○**竹島 杏**（奈良先端大・バイオ）
過剰発現によりゼニゴケに高浸透圧ストレス耐性を付与する*SWEET*遺伝子の機能解析

○**廣居 桜子**（東北大・院工）
コケ植物由来カルコン合成酵素ホモログに対するCoA阻害様式の解析

○**堀木 文歌**（奈良先端大・バイオ）
新規高性能プロモーターの設計

IAPB2026参加報告

International Association for Plant Biotechnology (IAPB) Congress 2026（カナダ・サスカトゥーン 2026/07/27-30）において、本学会主催のシンポジウム”Japanese Plant Biotechnology society symposium - Genome Editing Technologies, Their Development and Beyond”を開催しました。Daniel Voytas教授 (University of Minnesota)、Holger Puchta教授 (Karlsruhe Institute of Technology)、今井亮三博士 (農研機構 生物研)の3名に先進的な植物ゲノム編集に関するご講演をいただき、活発な質疑が行われました。

国際化委員長： 遠藤 真咲（農研機構）



約200人の参加者全員での記念写真撮影。



JSPBシンポの様子。会場はほぼ満員でした。

国際会議参加奨励金受賞者 会議参加レポート その1

中 雄輝（近畿大学大学院 生物理工学研究科 博士後期課程3年）

このたび、日本植物バイオテクノロジー学会のご支援をいただき、2026年6月30日から7月2日まで、英国オックスフォード大学St Antony's Collegeで開催された「The Molecular Moss Workshop」に参加しました。本会議は、国際コケ分子科学会（iMOSS）が開催する、コケ植物の研究に特化した国際会議です。開催地である英国オックスフォード市は、歴史ある大学の建物や緑豊かな街並みが広がる、落ち着いた雰囲気の都市でした。滞在中は夏らしい気候で、日中は、気温が25°C前後まで上がり、日差しの中を歩くと暑さを感じました。しかし、朝晩は気温が下がり、風もあったため、爽やかで過ごしやすい気候でした。学会の合間にはオックスフォードの植物園や歴史的な街並みに触れることができ、英国の文化と自然を身近に感じる貴重な機会となりました。

The Molecular Moss Workshopでは、モデル植物である*Physcomitrium patens*（ヒメツリガネゴケ）を中心に、コケ植物を対象として、発生、環境応答、進化、代謝、細胞内シグナル、宿主-病原体相互作用など、幅広い研究成果が発表されました。合計63演題の発表が行われ、世界各国からコケ植物研究者が集まり、専門性の高い議論が交わされました。

私は、ヒメツリガネゴケ由来クラスⅢペルオキシダーゼであるPrx34の機能解析について研究を行なっています。今回の学会では、「Potential role of a class III peroxidase, Prx34, in *Physcomitrium patens*」という題目で、Prx34が細胞内の活性酸素代謝において主要な役割を担う可能性についてフラッシュトークで報告しました。限られた時間内で、研究の背景、主要な結果、そして研究の意義を英語で明確に伝える必要があり、発表前には大きな不安を抱いていました。実際に壇上に立った際には、緊張のあまり手足が震えるほどでした。しかし、大学での準備に加え、渡航中や現地での移動時間にも繰り返し練習を重ねていたため、その成果を生かし、最後まで発表をやり遂げることができ、自身の研究をコケ植物研究の専門家に向けて発信できたことが、大きな達成感と自信につながりました。さらに、休憩時間や食事の時間を通じて、国内外の研究者や学生の皆様と交流する機会がありました。伝えたいことを英語で十分に伝えられなかったことには、心残りも感じています。今回の経験を今後の課題として受け止め、研究内容や自分の考えを英語で的確に表現する力を、これからさらに磨いていきたいと考えています。

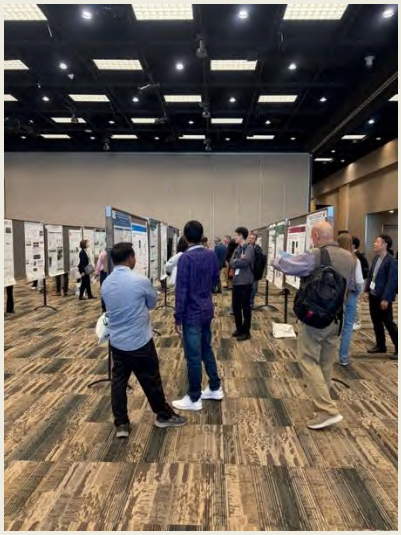
最後に、The Molecular Moss Workshopへの参加に当たり、参加費用をご支援いただきました日本植物バイオテクノロジー学会ならびに選考委員および理事会の先生方に、心より御礼申し上げます。このたび得られた経験を今後の研究活動に生かし、研究成果のさらなる発展と国際的な発信に努めてまいります。このような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

国際会議参加奨励金
若手研究者の海外経験の奨励を目的に植物バイオテクノロジーに関連する海外国際会議へ参加発表する会員（若干名）への渡航滞在費用（上限20万円）をサポートします。例年、4月末締切で6月決定です。2027年度も募集予定です。



国際会議参加奨励金受賞者 会議参加レポート その2

小坂　七海（東京大学大学院　農学生命科学研究科　博士課程2年）



ポスターセッションの様子

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程2年の小坂七海と申します。私は国際会議参加奨励金の援助を受け、2026年7月26日から30日にかけてカナダ・サスカトゥーンで開催されたInternational Association for Plant Biotechnology (IAPB) Congress 2026にて参加・発表を行いました。

サスカトゥーンはバンクーバーから飛行機で2時間ほどのところにある、カナダ中部サスカチュワン (先住民族の言葉で「速く流れる川」) 州最大の都市です。カナダでも有数の穀倉地帯 (小麦) で、広大な畑のほか農業系の研究施設が多数立ち並びます。着陸前、小麦畑が眼下一面に広がっていたことが印象に残っています。

空港に到着後、ダウンタウンに出るためにはバスに乗る必要があるのですが、クレジットカードは使えません。また、持ってきたカードすべてキャッシングを行うことができなかったため現金を入手することができず、小一時間ほど詰みました。しかし、Geminiのおかげでスマホアプリとオンライン決済でバスのチケットを購入できることを知り、事なきを得ました。現代のAIにより海外のハードルが下がってきていることを実感し、ありがたい気持ちになりました。夏のサスカトゥーンは最高気温が30°Cほどあり、日中は日差しが暑いのですが、湿度は低く乾燥しているため快適に過ごせました。

26日日曜日の夕方から会議が始まりました。最高気温が高かったため半袖しか持参しなかったのですが、会場の冷房が効きすぎていて寒い！ひたすら鳥肌を立てながら会議に臨みました (欧米人は寒い環境に順応しているため、夏は冷房を強めに効かせているそうです)。私のようにモデル植物シロイヌナズナを用いて研究している方はかなり少数派で、実際の作物でゲノム編集系をどう働かせるか、組織培養・形質転換系をどのように立ち上げるか、という実地に近い技術開発に関する発表がメインでした。コムギやトマトからメロン、ホオズキ、ブラックベリーに至るまで、さまざまな作物で技術開発が世界中で試みられていることを知り、非常に勉強になりました。モデル植物を用いた研究発表も、Dr. Holger Puchta先生のシロイヌナズナの染色体数を減少させる研究や、Dr. Jae-Yean Kim先生のシロイヌナズナPrime editingの編集効率をroot-to-shoot transformationで改善する研究など、強烈に印象に残っています。私自身も口頭発表を行いました。若干のトラブルはありましたが、発表後には数名の先生方に「面白かった」「今後に期待している」と声をかけていただき、嬉しかったです。国際学会での口頭発表は緊張するし英語での準備が必要になりますが、その分存在感を放つことができるのでおすすめです。

学会主催のテクニカルツアーにも参加し、Global Institute for Food Securityという実験施設を見学しました。限られた人員で効率を最大化するために、クローニングにおける形質転換やコロニー選択、さらにタンパク質スクリーニングなどのあらゆる作業を自動化・同時並行できる機械が惜しみなく導入されておりました。また、次世代シーケンシングも受託しており、Novaseq X Plus (1週間前に新品が届いたばかり！) 、Revio、AVITIなどのマシンが常備されていました。最新の機器類を見ると心が躍ります。さらに、エンドウマメ根腐れ病の防除に関する研究の様子を見せていただきました。カナダの圃場では根腐れ病の原因菌が蔓延しているそうで、その対策に対する関心と熱量の高さを感じました。

本学会への参加を通して、基礎研究から応用技術開発に至るまでさまざまなバイオテクノロジーについて勉強になり、自身の今後の研究にとって大きな刺激を得ることができました。最後になりますが、参加を資金面で援助してくださった日本植物バイオテクノロジー学会と学会員の皆様に、改めて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



名誉会員の推薦

名誉会員規程に則り、東京農工大学名誉教授の小関良宏先生、東京大学名誉教授の吉田薫先生が名誉会員に推薦され、鳥取大会中の9月5日に表彰式が行なわれました。

小関先生は、長年にわたり本学会の要職を歴任され、2012～2013年度には会長を務められました。また、植物の組織培養、特化代謝、転写調節など、植物バイオテクノロジー分野に関する優れた研究成果により、本学会学術賞をはじめ多数の賞を受賞されてました。さらに、食品安全委員会の遺伝子組換え食品等専門調査会委員として、遺伝子組換え食品の普及、社会的受容などにおいてもご尽力されました。

吉田先生は、長年にわたり本学会の要職を歴任され、2022～2023年度に本学会会長を務められました。また、植物のリン貯蔵物質であるフィチン酸の生合成経路に関するご研究に注力され、低フィチン酸飼料につながる組換え米を作出されるなど、学術・産業の両面で多大な成果を挙げられました。さらに、日本学術会議連携会員として、植物バイオテクノロジーに関わる社会的課題の検討にもご尽力されました。

両先生のご功績をたたえ、深く感謝の意を表します。





定款・規程の変更

1. 役員の年会費支払免除に関する文言の変更 （定款の変更）
定款 7 条（年会費）
（修正前）定款第 7 条 3「会長、幹事長、編集長及び会計幹事は年会費の支払義務を免除する。」
（修正後）定款第 7 条 3「役員は年会費の支払義務を免除する。」

2. 新任副会長の扱いに関する文言の変更 （定款の変更）
定款18条（役員の設置）
（修正前）定款第 18 条 5「代議員による会長候補者の選挙の結果、会長候補者に選出された者はただちに理事となり、副会長となる。」
（修正後）定款第 18 条 5「代議員による会長候補者の選挙の結果、会長候補者に選出された者は、副会長となる。」

3. 議事録の電子署名に関する文言の変更 （定款の変更）
定款29条（議事録）
（修正前）定款第 29 条 2「出席した会長及び監事は、前項の議事録に記名押印する。」
（修正後）定款第 29 条 2 出席した会長及び監事は、前項の議事録に記名押印または電子署名する。

4. 選挙権及び被選挙権の基準に関する文言の変更 （選挙規程の変更）
（追加）
（選挙権及び被選挙権の基準）
第 4 条 代議員選挙において、選挙権及び被選挙権を有する者は、投票開始日の属する月の前々月末日（以下「基準日」という。）において、一般会員、学生会員、シニア会員または名誉会員である者とする。
2 基準日の翌日（投票開始日の属する月の前月 1 日）以降に入会した会員は、当該選挙における選挙権及び被選挙権を有しない。
3 被選挙者名簿に記載される所属先は、基準日時点において本学会に登録されている情報に基づくものとする。
4 前各項の規定にかかわらず、 投票開始日から代議員の任期開始日までの間に、 退会、除名その他の事由により本学会の会員資格を喪失した者は、当該選挙における選挙権、被選挙権及び当選者としての地位を失う。
（修正）
現行４条以降 （会長の選出、会長候補者選挙、会長候補者選挙の方法、改廃）の条文の番号をずらす

各種委員会

（下線は委員長）

編集委員会
七里 吉彦（編集長）、
關 光（副編集長）、朝比奈 雅志、井川 智子、池田 美穂、植村 知博、大谷 美沙都、小口 太一、神田 恭和、木場 章範、佐藤 長緒、下遠野 明恵、杉山 暁史、鈴木 章弘、鈴木 栄、鈴木 史朗、高梨 功次郎、竹村 美保、太治 輝明、鄭 貴美、中野 優、楢本 悟史、野中 聡子、野村 泰治、平野 智也、松尾 幸毅、宮城 敦子、矢野 亮一、横井 彩子、若林 孝俊、Brian Jones、Joanna Putterill

広報委員会
棟方 涼介、大島 良美、杉山 龍介、田村 啓太

男女共同参画・キャリア支援委員会
藤原 すみれ、佐藤 長緒、三浦 謙治、宮田 佳奈

国際化委員会
遠藤 真咲、秋山 遼太、有村 慎一、丸山 明子

産学官連携委員会
佐々木 克友、加藤 晃、佐藤 長緒、安本 周平、矢野 翼、横井 彩子

代議員

青木 考、明石 欣也、朝比奈 雅志、有村 慎一、井川 智子、稲田 のりこ、今井 晃三、岩瀬 哲、梅田 正明、梅原 三貴久、江面 浩、大谷 美沙都、岡澤 敦司、刑部 祐里子、加藤 嘉博、加藤 晃、川合 真紀、草野 都、肥塚 崇男、小泉 望、児玉 豊、土反 伸和、庄司 翼、杉山 暁史、關 光、太治 輝昭、土岐 精一、寺川 輝彦、野中 聡子、濱田 晴康、本橋 令子、三浦 謙治、水谷 正治、光田 展隆、安本 周平、山崎 真己、横井 彩子、吉田 薫

学会賞推薦のお願い

2027年度の日本植物バイオテクノロジー学会賞の推薦（自薦可）をお願いいたします。締切は12月末日までとなっております。
多くのご推薦をお待ちしております。

- 候補者の推薦は、電子メールで学会事務局（jspb-post@as.bunken.co.jp)宛にお送り下さい。
- 件名を「JSPB学会賞推薦」とし、学会ホームページ（https://www.jspb.jp/society_award/forms-for-society-awards/）から「様式1」をダウンロードしてご記入いただき、ファイル添付にてお送りください。
- 推薦にあたっては候補者の内諾を取っていただくよう、お願いいたします。
- 受け付けた場合はメールにて必ず受け付けたことを連絡いたします。連絡がない場合はご面倒ではありますが、再送の程よろしくお願いいたします。

特別賛助会員のご紹介

本会の運営にご協力賜り感謝申し上げます。
（五十音順）

- カゴメ株式会社
- 株式会社インプランタイノベーションズ
- 株式会社 カネカ
- 株式会社 日本医化器械製作所
- キリンホールディングス 株式会社
- クミアイ化学工業 株式会社 生物科学研究所
- グランドグリーン 株式会社
- クリムゾンインタラクティブ　英文校正・校閲-エナゴ
- 三栄源エフ・エフ・アイ 株式会社
- サントリーグローバルイノベーションセンター 株式会社 研究部
- シンジェンタ ジャパン 株式会社
- 住友化学 株式会社 生物化学グループ
- バイエル クロップサイエンス 株式会社
- 北海道三井化学 株式会社 ライフサイエンスセンター
- 未来食研究開発センター株式会社

編集後記

本号より会報作成を担当することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。歴代幹事長の編集された会報に倣いつつ、さらなるコンテンツの充実を図っていきたいと思いますので。会員の皆様からのご意見やご投稿をお待ちしております。

幹事長　高橋 征司（東北大）
takahashis@tohoku.ac.jp

JSPB
Japanese Society for Plant Biotechnology

学会事務局
〒162-0801
東京都新宿区山吹町358-5
（株）国際文献社内
TEL: 03-6824-9378
FAX: 03-5227-8631
jspb-post@as.bunken.co.jp

学会ホームページ
https://www.jspb.jp/